

### <応募方法>

郵送の場合は応募用紙とあわせて下記応募先の宛先へ、電子メールの場合は応募用紙の項目を記載し、下記応募先の電子メールアドレスへお送りください。学校で取りまとめて応募することも可能です。なお、作品中に他人が著作権をもつ著作物等が含まれる場合には、許諾を得た著作物等とその著作権者等の連絡先のリストも添付してください。

### <応募先>

#### 郵送

700-0022 岡山県岡山市北区岩田町2-12F-ADIビル3階北 株式会社ロゴデザイン内「親へのエール論文審査実施事務局」宛  
(応募の際は「子から親へのエール論文在中」と朱書きのこと)

#### 電子メール

diversity@logoo.design

### <審査方法、各賞授与>

岡山県内の大学関係者で組織する審査委員会で、厳正に審査を行います。高校生の部・大学生の部それぞれで入選作品を選出し、その中から「岡山県知事賞」「岡山経済同友会代表幹事賞」「岡山大学長賞」を授与します。

また、積極的に取り組んでいただいた学校には「ダイバーシティ教育推進学校賞」を授与します。

### <入選発表>

2024年12月中旬に本人へ入選・入賞の連絡をいたします。

なお、入選されなかった方への連絡はいたしません。

**2025年1月17日に岡山県庁で表彰式を行います。**

受賞された方はご出席をお願いします。

### <作品発表>

作品集として冊子を作成し高校や大学、関係者などに配布するとともに、当実行委員会のホームページに掲載いたします。

### <応募に際しての注意事項>

ホームページに詳細な募集要項を掲載しておりますので、必ず内容をご確認ください。

URL <https://logoo.design/yell>

郵送の際は、下記応募欄に必要な事項をご記入いただき、論文と同封の上ご応募ください。



## 応募用紙

### 1. 個人応募記入欄 (個人でご応募いただく場合はこちらをご記入ください)

氏名	ふりがな		
住所	〒 -		
電話番号	メールアドレス		
学校名	学年	年	

### 2. 学校取りまとめ応募記入欄 (学校で取りまとめてご応募いただく場合はこちらをご記入ください)

学校名	担当教員名	ふりがな		
学校住所	〒 -			
担当教員電話番号	担当教員メールアドレス			
1 応募生徒名	ふりがな	学年	年	
2 応募生徒名	ふりがな	学年	年	
3 応募生徒名	ふりがな	学年	年	
4 応募生徒名	ふりがな	学年	年	
5 応募生徒名	ふりがな	学年	年	

子から親への  
エール論文  
コンクール  
2024

仕事や家庭で  
頑張っている親へ  
今だから言える  
ありがとう。

普段はなかなか伝えることができない  
親への感謝の気持ちを伝える  
論文を募集します。

「仕事や家庭で頑張っている親へ今だから言えるありがとう」をテーマとし、仕事や家庭で頑張っている親に対して、泣いたり、笑ったりしたエピソードや親へのエールとなるメッセージを添えて、働き方の多様性など社会におけるダイバーシティの在り方を主に家庭の視点から考える論文を募集します。家庭と仕事のはざまで起きている具体的なエピソードと親へのエールとなるメッセージに加えて、自身の意識や行動の変容、ならびに提言を交え、作品をお寄せください。

問い合わせ：ダイバーシティ推進実行委員会おかやま事務局  
(株式会社ロゴデザイン内)  
祝日を除く 月曜日～金曜日 10:00～17:00 TEL：086-235-6010  
diversity@logoo.design www.logoo.design/diversity

2024 **10/31** 締切  
当日消印有効

募集期間：2024年6月17日(月)～10月31日(木)

対象(応募資格)

県内外の高校生・大学生  
(専修学校・各種学校生を含む)

募集作品の規格等

書式自由、文字数 1,600 字程度  
冒頭に題名(作品タイトル)と氏名を明記してください。

賞の種類と副賞

岡山県知事賞 -副賞-  
岡山経済同友会代表幹事賞 図書券10,000円  
岡山大学長賞

# 過去の受賞作品紹介

その他の受賞作品については  
ホームページに掲載しております  
スマホからのアクセスはQRコードをご利用ください  
<https://logoo.design/diversity>



2023年度  
高校生部門

岡山経済同友会  
代表幹事賞  
受賞

## 父へのエール ～私の言葉で社会を変える～

おかやま山陽高等学校3年 橘 里香サニヤ

幼い頃、いじめられて泣いている私に「前向きにね」と頭をなでながら何度も励ましてくれた父。しかし、私はいじめられた理由を父に言うことはできませんでした。

私はインドネシア人の父と日本人の母の間に生まれたハーフです。日本で生まれ育ち、日本語しか話せません。幼い頃から、私の名前を見ただけで「日本語が上手だ」と言って国籍を尋ねてくる人、外国人が事件を起こすとテレビや新聞で報道されると「やっぱり外国人は犯罪を起こす」と軽蔑し暴言を吐く人など、私は「普通の」日本人として受け入れてもらえない日々を苦しましました。そして何よりもそれを家族に打ち明けることができず、泣くことしかできない自分自身を情けなく思っていました。

そんな環境を変えたかった私は家族の理解と協力のもと、高校入学を機に鳥取県から岡山県に家族皆で引越し、幼い頃からの夢であったパティシエになるために製菓科のある高校へ進学しました。高校ではあの辛かった日々が嘘のように、同じ目標を持った仲間と囲まれ、楽しく高校生活を送ることができていました。

しかし高校1年の冬、岡山市の建設会社で起きた外国人技能実習生への暴行事件が報道された時、父は24年前に技能実習生として来日して以来、日本で暴言や賃金未払いなど不当な扱いを受け続けていることを初めて家族に打ち明けたのです。日本で働けば家族を楽にさせてあげられると信じ、どんなに辛く大変な仕事でも弱音を吐かずに仕事に打ち込んできた父。初めて聞く日本語と慣れない日本文化に戸惑いながらも言葉の勉強を続け、何不自由なく日本語を話すことができるようになったにもかかわらず、父の努力を認めようとせず、漢字が上手く書けないと分かれれば「うちの会社で仕事はできない」と言われたり、一ヵ月で仕事を全て覚えられなければすぐに辞めることを採用条件に出されたりと、外国人という理由で正社員として働くことは難しいと何度も言われたそうです。また、仕事の説明や休憩時間を故意に伝えられなかったり、必要な残業をしても「勝手にしてい

るから」と残業代が支払われない理不尽さを経験してきました。そして昨年11月、外国人という理由で父は解雇され、長期間仕事が決まらない我が家は貯金を切り崩しながらの生活で、先が見えず不安で心が暗く沈み、あれだけ不平不満を言わず前向きに生きようと言っていた父でさえも笑顔を忘れかけていたのです。

こんな納得のいかない状況を変えたいと思った私は、今度は私が父を励ます番だと考え、私のできることを探しました。アルバイト代は全て家庭に入れるだけでなく、私の言葉でこの社会を少しでも変えたいと考えるようになった私は、高校で始めた弁論でこの問題を取り上げ、一人でも多くの人に外国人労働者の抱える問題を知ってもらい、私の言葉で社会を変えてみせると心に決めたのです。

今年4月、やっと仕事が決まった父は、私が家で弁論の練習をしていると、「サニヤが頑張ってるんだから、お父さんも仕事を頑張らないとな」と笑顔で言ってくれるようになりました。その父の姿に、私は将来日本で暮らす外国人の支えになりたいと思うようになりました。言葉が分からず一人不安な日々を過ごす人、正しく評価されず悔しい思いをする人など、希望を抱いて来日した人が絶望的になりかけている状況を救うために、私は心の支えになりたいのです。不当な扱いをされる社会ではなく、公平な評価が受けられるように、そして外国人労働者達の現状を知ってもらうために、私は声を上げ続けていきたいのです。

今もなお非正規雇用で働く父は外国人労働者という理由で不当な扱いが続き、公平な評価を受けることができていません。日本で安心して笑顔で生活できるように、そしてどこの国の人でも安心して日本で仕事ができる社会に変えるために、私はこれからも父へのエールとして弁論を続け、私の言葉で日本を温かい社会に変えていきます。

2023年度  
大学生部門

岡山大学長賞  
受賞

## 母の話

山陽学園大学3年 松本 岳

両親が離婚したのは、僕が保育園年長を迎えた頃だった。深夜に、僕がリビングの扉の隙間を覗くと、そこには、なにやら神秘的な面持ちで向かい合う両親の姿があった。あまりに異様な雰囲気を感じた二人を見て、背中の方からじわじわと不安に満ちた気が全身を包んでいった。

父との離婚で、当時、家事育児で大忙しだった母への負担は、更に強く押し寄せた。朝方、母はその日の夕飯の作り置きや、身支度を済ませて僕たちを保育園に送ると、息つく間もなくその足で職場に向かい、日暮れどきに仕事の休憩時間を利用して僕たちを迎えにきてくれた。そして、またすぐに仕事へ向かい、僕たちが寝静まった夜更けに帰宅。それから、翌日の米を炊き、山積みの服を洗濯して、台所の洗い物やシンクの掃除といったあらゆる家事を終えてからようやく床に就く頃には、時計はいつも0時を回っていた。

そんな日々の中で、僕たちと母が同じ時間を過ごすのは、日曜日だった。何か変わったことをするわけではないけれど、毎週訪れるその日を僕は心待ちにしていたし、忙しい母がリビングのソファで悠々と羽を休める姿を見ていると、それだけで特別な日に感じられた。僕は幼心に、母の大変さをどこか感じ取っていて、よく母の仕事着姿をスケッチしていた。その絵を母に見せる度、一瞬、母は微妙な顔をして、僕が表情を伺うと、慌てたように笑顔をつくった。いま思えば、息子が描いてくれる絵が、楽しい家族の風景ではなく、仕事着の自分ばかりだったことを、心寂しく感じていたのかもしれない。

小学校に上がり、母の力を借りなくても、少しずつ自分のことに手が回るようになってきた僕は、三つ年上の姉と協力して家事分担表をつくった。曜日を目安に、例えば月曜日は僕が洗い物をして、火曜日は姉が風呂掃除。まだ保育園児だった弟と妹の世話も僕たちが並行して行う。母の助けになりたい、その一心だった。

家事分担を始めてしばらくは、慣れない作業に戸惑った。いくら擦っても、熱湯をかけて濯いでも取れない皿の油污れには心底嫌気が差したけれど、それでも母の喜ぶ姿を思い

浮かべると、そんな気持ちはどこかへ消えてゆくような気がした。僕たちが手分けしてやっとの思いで行う家事を、母は数年間、一人でやっていた。母の偉大さと愛情をひしひしと感じ、母への言い表せようのない感謝の気持ちで胸が埋め尽くされた。

とある日曜日の昼下がりに、昼食を作っている母が、突然声を漏らした。「毎日手伝ってくれてありがとう。それなのに母親らしいことができなくてごめんね。」

僕はすかさずキッチンに立つ母に目をやった。こちらに背を向けていて表情は窺えないけれど、その小さな背中がかすかに揺らいでいるように見えた。途端に胸の奥がじんわりと熱くなるのが分かった。同時に目の前が霞んでいく。温かな雫が一滴、また一滴と頬を伝い落ちる。愛情と感謝に満ちている。だから温かいのだと思った。僕は手の甲でそれを拭き、息を整えた。伝えないと、と思った。

「母さん、僕は母さんの子供で良かったよ。産んでくれて、育ててくれて本当にありがとう。」

頼りない声に思いをのせて、母に届くように言った。届いてほしいと思った。長くは言えなかったけれど、精一杯の気持ちを込めた。

それから長い月日が経った。24歳になった姉は結婚して、小さな命を授かった。妹は専門学校に進学し、弟は高校生になった。姉の自立をきっかけに、母は仕事を変え、以前よりはゆったりとした日々を送っている。

孫を抱く母の背中に、以前の母の面影を重ねてみた。小さかった背中は、更に小さくなっていて、けれど、まるで澄んだ深海のように、大きな愛情で溢れている。あの頃と変わらぬ母の姿がそこにはあった。

僕はこれからも母への感謝と愛情を忘れず生きていこうと思う。そして、将来、自分に子供ができたとき、母の話聞かせよう。